はじめに1

国公立大・私大の標準的な難易度でしかも良質な文章と設問を素材にした講座を編成しました。記述・選択肢・傍線部説明・空欄補充・知識モノなどバランスよく設問を選んでいます。また、既存のアーカイブ講座ではあまり扱っていない、**〈小説の記述問題〉**も一つ入れました。センター試験でおなじみの小説ですが、国公立大・私大でも意外によく出題されるため、夏のこのタイミングで取り組んでおきましょう。なお、論説・評論の筆者は、それぞれの学問分野を代表し入試にも頻出という、いわゆる「学界のアイドル」ばかりです。読書的な価値の高い文章ばかりということです。

【このライブ講座からはじめて小柴大輔担当の現代文を受講する生徒さんへ】

論説も小説もすべての文章に対して**「対比（比較）」**注目するという、現代文読解と解答の方法を提唱しています。わかりやすく解説するよう努めてまいりますが、いきなりライブ参加の前に、アーカイブの何らかの講座をちょっと見ておくことをおススメします。**『センター対策講座』『スタンダードレベル現代文』『トップ&ハイレベル現代文』『高1・高2現代文**（「高1高2」という講座名ですが採用している問題はすべて入試問題です）』いずれの講座でもかまいません、第一講を視聴してウォームアップしておきましょう。ライブ講座を最大限実りあるものにしましょう。ライブ講座の後、アーカイブの続きを視聴し、入試用の現代文対策の学習習慣を定着させましょう。

はじめに2

過去のライブ授業にて、よくある質問

質問1：「現代文の知識事項、たとえば漢字や語彙の対策もするべきですか」

回答：するべきです！　センターであれ、国公立大・私大の個別入試であれ、無視できない配点です。また論説・評論において問われる漢字は、重要概念であることが多く、文章理解とも直結しています。

質問2：「知識事項の勉強はどう進めたらよいですか」

回答：『**現代文〈重要語句・知識編〉**』という講座があります。テキストだけでもダウンロードしましょう。漢字・慣用句・口語文法・四字熟語・文学史さらに接続語の空欄補充問題もたっぷり練習できます。さらに文学史については『**早大現代文**』のテキストも参照してください。

なお市販の書籍としては、小柴大輔著『**読み解くための現代文単語**』（文英堂）があります。評論用語と小説用語の両方をカバーし、イラストも二〇〇カット！　また、評論と小説の読み方と解き方のコンパクトな総まとめとして、小柴大輔著『**一冊で現代文の読み方&解き方が面白いほど身につく本**』（KADOKAWA）があります。合わせてご参照ください。

予習について

予習（問題にアタック）しましょう。**あえて時間限定せず、じっくり解答してもＯＫです。**

復習の仕方について

間違えた部分について、同種の問題が本番でも出題されるというつもりで、見直してください。

授業中のノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。

解法の手順……文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルを見る**　↓　**テーマが判明する**ことが多い。さらには、「○○と○○」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくにセンター試験現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわることが多い**）。ただし選択肢まで読んではダメ。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

★小説の問６のみ、選択肢まで読んだ方が有益です！

（３　**本文最後の数行を先に**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。）

１と２で充分な見当がつけば、４に移行してＯＫ

4　**本文を冒頭から読む**

プランA……設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

プランB……プランAだとぶつ切りで文章理解のリズムが壊れるとお感じの人は、全文通しで読んでから各問に取り掛かってもよいです。とくに空欄補充をたくさん出す私大と異なり、センター国公立大個別試験の場合は、まるまる文章を読ませますから、プランBもあり。

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り**……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**といってもいい。

2 **同一性分断の誤り**……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り**……本文中で「**A↔B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C↔D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断**……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断**……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょうか）があります。例えば本文では「人間関係全般」について書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断**（不当な当為（とうい）判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7　部分的指摘の誤り
……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8　記述に反する誤り
……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9　記述なしの誤り
……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1～8・10～12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10　文脈喪失の誤り
……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11　物理的スリカエの誤り
……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢。**小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12　比喩を文字通りに解釈した誤り
……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

13　具体例は、一段、落ちる
……具体例を挙げている選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっとまとまった語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

14　比喩による説明は、一段、落ちる
……たとえで説明している選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっと明示的な語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

目　次

第一講　小説　記述編 …… p. 8

第二講　論説　哲学 …… p. 16

第三講　論説　記述編　哲学・心理・コミュニケーション論 …… p. 28

第四講　論説　芸術論 …… p. 34

第五講　論説　政治論 …… p. 48

第一講　小説　記述編

次の文章は、原田宗典の「小さく大きな舞台」の全文である。これを読んで、後の問に答えなさい。

それはもともと彼の望んだ職場ではなかった。

全国に何百というビルを所有しているその会社に就職した時、彼は新しい都市計画などを立案し実行するプロジェクトチームの一員として働くことを希望した。何千何万という人々の集う器を作り、周囲の環境を整え、滞りなく運営していく。それはきっと①神のように創造的で、手応え（てごた）のある仕事に違いない。彼はそう思っていた。

内定をもらった日、彼は生まれて初めて東京タワーに上った。そして第二展望台から東京の街を見下ろし、②自分がこれから創り上げていくであろう街の姿を想像して、何ともいえない興奮を覚えた。確かに子供っぽい想像には違いなかったが、夢としては上質の部類に属するのではないかと、彼は自分を褒めてやりたい気分だった。

しかし現実のスケールは、彼の夢を千分の一に縮小したような規模だった。入社してすぐに彼は管理課へ回され、研修期間を終えると同時に、会社が所有している都内の劇場に[注一]出向させられたのだ。

それは気が抜けるほど小さく、古ぼけた劇場だった。客席数二百七十。劇場と呼ぶのもおこがましいほどの規模だ。主にお手軽な講演会や会社のセミナーなどに使用されるらしく、照明機材や音響などの設備もお粗末なものだった。

彼はひどく失望した。

こんな所へ出向しても、彼にはやるべき仕事もない。何かを創り上げるわけではなく、既に出来上がっている器を貸し出して、料金を受け取るだけの仕事だ。そんなことは高校生のアルバイトでもできる。実際この劇場のスタッフは、事務を担当する二人の臨時雇いの女性と、支配人と呼ばれる上司と彼の四人で成り立っていた。しかもこの支配人というのがまったくやる気のない男で、劇場にはほとんど顔を出さずに、近所のパチンコ屋でぼんやり玉を弾（はじ）いてばかりいる。おかげで彼は着任早々、劇場のすべてを一人で運営しなければならなかった。

「ああ、厭（いや）だ厭だ」

臨時雇いの中年女性二人は、口癖のようにそう呟(つぶや)きながら机に向かう。血の繋(つな)がりはないはずなのに、二人は容姿も性格も驚くほど似かよっていた。確かな年齢は分からないが二人とも四十代の後半で、独身らしい。一週間に一度美容院へ行くことを無上の楽しみとしていて、異様なほど化粧が濃い。この二人と机を並べて[注二]帳簿などをつけていると、彼は自分が年老いた税理士にでもなり果てたような脱力感を覚えるのだった。

退屈な一年が過ぎた。

彼が本気で転職を考え始めたある日、劇場にちょっとした変化が訪れた。見ず知らずの若い劇団から、ホールを使用したいという打診があったのだ。もともとこの劇場は親会社の関連会社のみに貸し出す方針であり、公に使用を認めているわけではなかったので、無関係の劇団などから打診が入ることは皆無だった。それが、どこで聞き齧(かじ)ってきたのか、その若い劇団の座長は何のコネクションもなしにいきなり電話をかけてきたのだ。

支配人が受けたのなら、絶対に首を縦には振らなかったろう。しかし幸運にも、電話を取ったのは彼だった。そしてこのささやかな変化に、賭(か)けてみる気になった。

彼は退職を覚悟の上で、その若い劇団に一週間ホールを貸す約束をした。後になって本社の人間からあれこれとケチをつけられるに決まっていたが、(1)今さら意に介す必要もなかった。

そして劇団の公演の日がきた。

いつもホールを使用する人種とはまったく違う、若く生き生きとした人間が劇場に集まり、舞台装置の仕込みが始まった。その頃になって、支配人はようやく事態を呑(の)み込み、青い顔で彼を叱(しか)った。

「すべて君一人の責任だからな」

支配人はそう言い残して、事務所に引っ込んだ。

彼は痛快だった。じっとしていられなくて、背広姿のまま、劇団の連中に混じって仕込みを手伝ったりした。芝居の演目はシェイクスピアの[注三]「リチャード三世」で、舞台上には中世の城の一室を想わせるセットが組まれた。照明機材が運び込まれ、実際に明かりを当ててみると、そのセットは目を見張るほどリアルに浮かび上がった。

彼は、自分の劇場がこんなにもすばらしい物を造り出す可能性を秘めていたことを知って、唖然(あぜん)とした。劇団員たちは衣装を

つけて、セットの中で嬉々（きき）として跳ね回り、彼をますます驚かせた。

その夜。

事務所の連中も劇団員もいない、がらんとした劇場の客席に、彼は一人座っていた。薄明かりの中に浮かび上がる舞台上のセットをしばらく眺め、それから静かに立ち上がる。舞台へ上り、中央に立ってみる。そして昼間見た劇団員たちの動きを模して、動き回ってみる。

まるで中世の偉大な王になったような気分だった。彼は舞台上をくまなく歩き回り、上手（かみて）に設（しつら）えられた塔のセットの上に立った。見下ろすと静まり返った客席は、いつだったか東京タワーの上から見た東京の街に似ているように思えた。わずか二百七十席にすぎない小さなこの劇場の中に、東京がすっぽり収まっているようだ。

――もうしばらく、この劇場にいてみよう。

彼は思った。

――この小さな劇場の小さな舞台に、どれくらい大きなものを入れることができるのか、試してみよう。

その瞬間、(2)彼の胸の裡（うち）にある幕が静かに上がり、遠い喝采（かっさい）が聞こえてくるような気がした。

（原田宗典『小さく大きな舞台』による）

注一　出向＝籍をもとのところにおいたままで、命令によってよその会社につとめること。

注二　帳簿＝お金や品物の出し入れを記入する帳面。

注三　「リチャード三世」＝イギリスの作家シェイクスピア作の歴史劇。

問１　この作品は、様々なものが対比的に表現されている。波線部①②に対比されているものを本文中から抜き出しなさい。

①　神のように創造的で、手応えのある仕事　↕

②　自分がこれから創り上げていくであろう街の姿　↕

問2　傍線部(1)のように考えたのは、「彼」のどのような心境からか、本文中の表現をふまえて説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注━二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問3　この小説は、「彼」が「ささやかな変化」を契機にそれまでの状態から変容していく姿を、変容する前の場面（第一の場面）、変容のきっかけになった出来事の場面（第二の場面）、変容していく「彼」を描く場面（第三の場面）の三つの部分として描いている。以下の①②③の問に答えなさい。

①　第一の場面と第二の場面とをつなぐ一文を抜き出しなさい。

②　第二の場面と第三の場面とをつなぐ一文を抜き出しなさい。

③　また、第三の場面は、さらに前半と後半とに分けることができる。その間をつなぐ一文を抜き出しなさい。

問4　傍線部(2)は、「彼」のどのような心境を象徴しているか、わかりやすく説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注━二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問5　この小説の題名「小さく大きな舞台」には、どのような意味が込められているか、わかりやすく説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注━二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

知識モノ解説

文学史・人物紹介

●原田宗典＝はらだ　むねのり（一九五九～）東京生まれ、早稲田大学第一文学部演劇学科卒。小説家の原田マハ氏は、宗典氏の妹。よく混同される『ぼくらの七日間戦争』など「ぼくら」シリーズの筆者は、宗田理（そうだおさむ）

●ウィリアム・シェイクスピア（一五六四～一六一六）イギリスを代表する劇作家。『ジュリアス・シーザー』『ロミオとジュリエット』『夏の夜の夢』など作品多数。『ハムレット』『オセロ』『リア王』『マクベス』は四大悲劇と呼ばれる。日本語訳者としては、坪内逍遙（つぼうちしょうよう）・小田島雄志（おだじまゆうじ）・木下順二（きのしたじゅんじ）などが有名。とくに小田島氏は、個人による完全訳の最後の原稿を、なじみの喫茶店で書き上げたエピソードはよく知られている

語句

おこがましい→身のほど知らずに思い上がっているようで恥ずかしい

粗末＝そまつ→見るからに安っぽくみすぼらしい

無上＝むじょう→この上ないこと。最上。同音異義語の「無常」は変化せずこのままのものは何もないという仏教思想の一つ。「無情」はなさけや人間らしい感情がないこと

打診＝だしん→本格的な交渉に入る前に様子をうかがうこと。問い合わせること

皆無＝かいむ→まったくないこと

聞き齧る＝ききかじる→どこからかちらっと聞いて知っていること。類義語「小耳にはさむ」

コネクション→強い関係や背後の力

首を縦に振る＝くびをたてにふる→うなずくこと。賛成すること。同義語「首肯（しゅこう）する」

仕込み＝しこみ→準備や訓練をすること

唖然＝あぜん→驚いて声が出ない様子。通常、悪い意味で使うが本文では好ましい驚きで使われている。類義語「驚愕（きょうがく）」

くまなく＝隈なく→すみずみまで目がゆきとどいている

上手＝かみて→客席から見て舞台の右側

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）情報収集しシュウ職に備える　①周　②酬　③修　④就　⑤襲
（イ）前例通りでソウ造的ではない　①創　②想　③壮　④総　⑤燥
（ウ）未来への長期的テン望を語る　①天　②典　③転　④添　⑤展
（エ）試合の成り行きに興フンする　①噴　②奮　③吻　④紛　⑤憤
（オ）外部からの注文はカイ無である　①戒　②階　③界　④壊　⑤皆
（カ）現物をシュク小して表現する　①縮　②宿　③祝　④粛　⑤淑
（キ）現場に出る前にケン修を受ける　①験　②険　③研　④賢　⑤検
（ク）関係者がリン時に集められる　①倫　②鈴　③鱗　④隣　⑤臨
（ケ）髪型やヨウ姿が気になる　①要　②養　③庸　④洋　⑤容
（コ）来年の都合について打シンする　①深　②診　③審　④身　⑤振

模範解答

第一講　模範解答

問１

①　何かを創り上げるわけではなく、既に出来上がっている器を貸し出して、料金を受け取るだけの仕事

②　気が抜けるほど小さく、古ぼけた劇場

（別解：既に出来上がっている器、わずか二百七十席にすぎない小さなこの劇場／この小さな劇場の小さな舞台）

問２　当初の夢とはかけ離れた現実の職場に失望し、本気で転職を考えていたため、退職を覚悟でいつもと違う変化に、かけてみる気になっている心境。

問３　①　退屈な一年が過ぎた。　②　そして劇団の公演の日が来た。　③　その夜。

問４　自分の勤める小さな劇場がすばらしいものを造り出す可能性を知り、転職せず劇場に留まり、これからもどれだけの仕事ができるのか試してみようとの前向きな心境。

問５　創造的に働く夢に比べて小さくつまらなく見え、また物理的にも小さな劇場が、実は大きくて創造的な可能性をもつことに気づいた主人公の心理を表現している。

復習問題　模範解答

復習問題　第一講　模範解答

（ア）④　（イ）①　（ウ）⑤　（エ）②　（オ）⑤
（カ）①　（キ）③　（ク）⑤　（ケ）⑤　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）就職　（イ）創造的　（ウ）展望　（エ）興奮　（オ）皆無
（カ）縮小　（キ）研修　（ク）臨時　（ケ）容姿　（コ）打診